

セントロモニと言えば、盗聴技術の最高峰の集団として、裏の世界の人間には良く知られていた。そのセントロモニの若頭であるモサは、長老のオケーニから呼び出しを受けていた。

「この間の覗き犯の爆死の件だな」とモサは思った。

セントロモニの秘宝である、「ロモノの耳石」は、通信波から意識波にいたるまでを受信できるセントロモニのコア技術であり、その製造方法は、門外不出の秘伝でもあった。

この門外不出の秘宝が三日ほど前に不審な者に奪われようとしたのだ。だが、秘宝を収めた箱には特別の手順で開かなければ爆発する仕掛けが施されており、その爆発によつて不審者は死んでしまったのだ。

その不審者の侵入方法から、おそらくは近年、海賊界のルールを無視し、強引なやり方で勢力を伸ばしている大型の海賊集団ジュノーの仕業だろうと考えられた。彼らはなぜか、ロモノの耳石の製造方法を高く買いたいとゴリ押しをしてくていた。

「ヤンビ！ オケーニさまからお呼び出しがかかった。すまないが、並耳石の仕上げは、おまえがやってくれるか。注文先もお急ぎなのでな」

「わかりました」と、長年モサの助手を務めているヤンビは、その腰の曲がった姿のせいで、モサを見上げるようにして返事をした。

個人用浮遊艇で十五分ほど走った場所に長老の館はあった。モサは、使用人に導かれるまま、面会の部屋へと入る。

「呼び立ててすまなかつた。だが大事な話があつてな」とオケーニは痩せた体に光る目でモサを見ながら言った。

「先日の『事故』の件ですな」

「うむ。それもある。が」と長老オケーニは目を半眼にし、指の先に巻き付けた赤い糸をくねらせた。耳石を編み込んだ赤縄（せきじょう）だ。

親指と人差し指、中指を赤い糸がつなぎ、この最果ての星、アニアンニウムの空に張り巡らせた星域盗聴網の情報を、意識通信を経由してオケーニの脳内に送り込んでいる。簡単な赤縄だけで「アニアンニウム外路」の情報を受信するのは、かなりの経験と鍛錬がなければできないことだ。セントロモニの技術者の中でも長老のオケーニとモサなど、一部の者にしか扱えない特殊技術である。

「どうも、ユイーナの帯を抜けて、このアニアンニウムにスパイが降り立つようだ」とオケーニは複雑に交錯する情報を選び分け、自分たちに関連する情報を読み取っているらしい。

オケーニはアニアンニウムという星全体をパラポラアンテナのようにしている星域盗聴網からの情報に意識を集中していた。

ロモノの耳石の技術を門外不出とするために、盗聴集団セントロモニの創始者、ヨメノ三世は、この最果ての星アニアンニウムに住居を定めた。アニアンニウムの周囲にはユイーナの帯と呼ばれる小惑星群（アステロイドベルト）がかなりの密度で点在しており、その複雑な動きを把握していない限り、ワープでこの星へ降り立つことはできない。技術者集団が、独自技術を継承しながら生活基盤を築くには最適の場所だったので。

「しかも」とオケーニはまだ目を開かずにつけてモサに語り続ける。

「その潜り込む者は、ロモノの耳石の秘密を解き明かしたいようだ」

「それは尋常ではありませんね」とモサは息を殺して聞く。

「いったいどの差し金ですか。やはりジュノーですか」

「いや、わからん。ジュノーと宇宙警察の間でかなりの複雑な神経戦をやっておるようだ。暗号の変更と解析の跡が、ジュノーと警察とで完全に一致する。そして、その両者の情報に共通して『セントロモニに潜り込め』という指令が見える」

「油断できませんね」

「うむ。そうだ」とオケーニはやつと目を開いた。元々、セントロモニの外からやってきたにもかかわらず、この地に住みつき、盗聴技術を磨き上げる事で長老の立場にまで上り詰めた伝説の人物。それがオケーニだった。その解析技術にモサもなかなか追いつけなかった。

「そこで、モサ、おまえに頼みたいことがあつて、呼び出したのだ」

「なんでしよう？」とモサは襟を正して真剣に聞いた。モサはオケーニの盗聴技術にあこがれている。師匠の言葉は絶対なのだ。

「もうすぐ、宇宙警察から客人がやってくる。

この者がスパイでないか、付き添って監視してくれぬか」

「はい。しかし、あまりにあらさまですね」

「ふむ。それが複雑だな。その客人の乗ってきたユイーナラインの定期便が何者かに爆撃を受けた」
「なんですって」

「その客人は先日の秘宝の爆死事件の監察官でな、あくまで事後処理の確認にただけなのだ。本来なら定期便で帰っていただくところなのだが、定期便の修復の間、留まっていたかどうか」

「そうなのですか」

「調べてみたのだが、どうやら定期便の爆撃はジュノーの仕業らしくてな。監察官が来ること自体を邪魔したようだ」

「良く無事でしたね」

「そうだな。死者もかなり出ている。このどさくさで、潜入者が紛れ込まぬとも限らん、注意してご案内差し上げてくれ」

「わかりました」

2

モサはそのまま、客人の待つアニアンの拝殿に向かった。長老の館の中にある儀式用の建物であり、時により迎賓館の役目も果たしている。

「来たか。モサ」

出迎えてくれたのはセントロロモニの次期当主候補であるヨメノ家のロンナだった。モサとは幼馴染の間柄であり、長老オケーニの下で当主見習いとして、長老オケーニの内弟子として、長老の館に住み込んでいる。「内弟子はどう？ 辛くはないかい？」とモサはロンナに聞いた。今回の監視任務でもそうだが、オケーニからの依頼はとて難しく厳しい。外で指示を受けている自分ですら、大変な思いをしているのに、内弟子ならその厳しさは何倍にもなっているのではないかとモサは想像していた。

「いや、オケーニさまは、どうにも俺を甘やかしてくれてな、困るんだよ。ヨメノ家に遠慮されてるようだな」

そんなこともあるのか、とモサは思った。

他の星域からやってきたオケーニは、ロンナの父であるヨメノ十三世に見いだされ、実力主義で、次期首領に取り立てられたという経緯がある。技術者集団ならではの實力重視の政権移譲ではあったが、そのことでオケーニはヨメノ家に負い目を感じていたのだ。そんなこともあり、今回の移譲では、長老オケーニはこの星の統治権をヨメノ家に返したがっているというのだ。

実際、ヨメノ十四世であるロンナは、盗聴に対する能力も高く、アニアンニウム星でも高い人気を誇っており、まさに次期首領にふさわしい人物であった。

「すでに、君が当主の器だっただよ」とモサは幼馴染のロンナをなぐさめた。ロンナは「かも知れないが」と言いたげな表情でうなずくだけだ。

「それで客人はどこに？」と、モサは用件に戻った。

「うむ、隣の部屋へ行こう」とロンナに促されて、モサは、古いが高級感がある調度品に囲まれた応接室へと入った。すべてヨメノ三世時代の言われのある品々ばかりだ。

その時代があった椅子に座っていた男は、モサが部屋に入ったとたんすばやく立ち上がり、自己紹介した。名をヨロハニと言い、宇宙警察捜査局の監察次官ということだった。

モサも自己紹介をし「この度はご災難でございました」と、まずユイーナラインの事故の件をねぎらった。「お気遣いありがとうございます。爆発は大きかったですがおかげさまでかすり傷で済みました」

そう答えたヨロハニ監察次官は顔や手足にうっすらと擦過傷保護のための、フィルムジュエルの跡が見られた。ジュエルのおかげで傷があるようには見えないが、数の多さや面積の広さから、かなり広い範囲でケガをしているようだ。

「先日の事故の件に関しては、ヨロハニ様に、私の方から説明をさせていただいた。すでに実地検分も終わっている」とロンナがモサに状況を説明してくれた。

「現場調査官の事故状況計測は先日終わっております。私の検分は、形式的なものと考えてください。検分なしに調査は終了できませんので。ご理解ください」とヨロハニは慣れた口調で自分の役割を説明した。

「ヨロハニ様は、事故現場もさることながら、事件が起きた背景を確認したいそうだな。例の”秘宝箱”ができた経緯、耳石の製造工程などをお知りになりたいそうだな。これは、モサの方が詳しいだろう。工房の方にご案内して、ご説明差し上げてくれないか。私は、この館から出るわけには行かないのでな」とロンナはモサに役割を伝えた。

いきなり核心をついた調査だ、とモサは思う。どこからのスパイであれ、容易ならざる人物に違いない。「わかった。では、ヨロハニさま。こちらへ」とモサはヨロハニとともに個人用浮遊艇でモサの工房へと戻った。

3

「ヤンビ、絶望の丘からキミハ峠を抜けてロモニの湖水へ向かってくれ」と、モサは工房で乗り換えた歓待用中型浮遊艇を運転するヤンビに声をかけた。モサの隣にはヨロハニが同乗している。

「よろしいのですか？ 部外者の方にはヨメノの儀式を受けていただく決まりになっておりますが」とヤンビは、浮遊艇の行先設定パネルを開きながらモサに確認した。

「影の方の取引とは違うのだ」とヤンビに声をかけた後、モサは顔を回して、その言葉の続きをヨロハニに向けて話し始めた。

「我々、セントロモニは、正直な話、闇の勢力の方々とも取引をいたしております。あまり、小賢しい隠し立てをして、何かと探りを入れられるより、できるだけありのままをお伝えした方が話も早いし、不要な情報が警察に漏れることも少ない。私はそう考えております。何より痛くない腹を探られるのは時間の無駄ですからね。取引先さまの情報は、どうしてもお話することはできませんが、セントロモニの内情に関しては、できるだけつまびらかにお伝えしたいと思います」とモサは明るい顔でヨロハニを見た。

「ははは。これは先制攻撃を仕掛けられましたね。さすがはロンナ様と並び称せられるモサ殿だ。胆力が違う。いいでしょう。私も腹を割って話します。」とヨロハニもにこやかな笑顔で対応した。

「我々警察は、あなたがたセントロモニの商売の邪魔をするつもりは全くありません。あなた方の技術や製品が、法を犯しているものたちに流れて行っても、それはとがめだては出来ません。それは宇宙政府交易ガイドラインに照らし合わせても合法ですから」と、ヨロハニは、警察によるセントロモニへの規制や介入があるのではないかと、というモサの疑念を、まず晴らした。

「ただ、『ロモニの耳石』のような高度な技術が、あまりに簡単に汎宇宙域で流通してしまうのなら、話は別です。海賊どもの勢力をいたずらに大きくすることに。そうなれば、あなた方に、どんな規制や介入が行われるかは保証の限りではありません。だからこそ、その前に『秘宝』について、いろいろお話を聞かせてもらえればと考えているのです」

モサは、正直、「良く調べている」と思った。ロモニの秘宝の本質を突いた質問をしてくる。この男、本当に一介の監察官なのか？ これは腹をくくらねばなるまい。と、モサは自分に言い聞かせた。

そのとき、「モサさま、そろそろ湖水に到着します」と運転席のヤンビが声をかけてきた。

「わかった。ヨロハニさま、話の続きは湖水の上でしましょう。その方が、あなたのご希望にも添えるでしょうから」とモサはそれ以上ヨロハニの質問には答えなかった。

「ロモニの湖水」は、モサとヤンビだけが名付けているロモニ耳石の生成所のことである。キミハ峠を下った場所に小さな湖があり、その湖面に浮かぶように精製所「ロモニの湖水」はあった。

「ロモニの湖水」は人が4〜5人も入れればいっぱいになってしまふほどの狭い空間だった。狭い部屋の床面は穴あき状になっており、湖面がそのまま観察できるようにになっていた。

「ここで私とヤンビとでマスター耳石を作っています。はつきり言いました。ロモニの秘宝とは、つまりはそのマスター耳石のことです」

「モサさま！」と、あまりに秘密を明かしすぎるモサの言動にヤンビが驚き制止しようとした。

「いいんだ、ヤンビ。こういうことは嫌でも漏れていく話だ」と、モサはヤンビの制止に柔らかく応え、話を続けた。

毒を食らわば皿までだ。どうせかなりの情報を仕入れているに違いない。逆に手持ちの情報をある程度見せてしまつて、相手の情報量や思惑を正確に把握してしまう方が、いまは得策だ。

「ロモニの耳石は、双頭双尾の魚ガヌイの耳を六十四個、立方格子状に配置したものです。これによって、

通信波、光波、音波、意識波、ヨイーヌβ波、センチティブヨイーヌ波まで受信が可能になります。しかし、通常の並耳石は、このロモニの耳石からの振動をヨイーヌ検子で立体復元しても、同じものは一個として作ることができません。耳石自身が持つ固定波長とヨイーヌ検子が干渉を起こすからです。しかし、耳石の純度を高め、耳石の固定波長をヨイーヌ検子の検出限界より低い波長で安定固定が出来れば、ヨイーヌ検子に相殺波長を送ることで、同じ性能を持つ耳石を立体複写が可能になります。」と、モサはマスター耳石の技術的原理まであっさりと言明してしまつた。

「ヤンビ、ガヌイの耳石採取の様子をヨロハニ様にお見せしてくれないか」

モサはそう言つて、ヤンビを促した。ヤンビは渋々、湖面に近づき手元のスイッチを入れた。狭い小屋の中で湖面が光り、その明るさに誘われるように双頭双尾の魚、ガヌイが集まつてきた。小さいものは二つある頭部分と、二つの尻尾が位置的に近く、まるでXの字のように見える。成魚となつたものは胴体が少し長くなり尾びれが華麗に水に舞っている。

「あのガヌイの体の左右に入っている線のようなもの、あれがガヌイの『耳』なのです」とモサは解説をはじめた。

「いま、この湖面にはヤンビの意識波が増幅される形で流されています。その意識波にガヌイが同調した瞬間に生体麻痺波動を、湖面に流すのです。少し時間がかかりますので、じっくりと見ていてください」とモサはその様子が良く見えるようにヨロハニを湖面近くへといざなつた。

湖面をじつと見るヨロハニの後ろで、モサはケーブ状になつている上着のふところに入ると赤繩（せきじょう）を指にからませ、星域盗聴網「アニアンニウム外路」から警察情報にアクセスした。警察の人名録を検索し、ヨロハニの顔写真を確認する。写真と顔が一致する。確かに、このヨロハニと名乗る男は、捜査局の監察官であるようだつた。

一瞬湖面が光ると、ヤンビはすかさずガヌイを特製の捕獲機ですくいあげた。双頭双尾魚ガヌイは左右にある数十個の線状の「耳」を光らせたまま捕獲機の中で硬直していた。

「耳石は通常、複数のガヌイから質の良い耳石を選別して製造します。しかし純度を高めるためには同じ一匹のガヌイから六十四個の耳石を取り出さねばなりません。そのために、この耳石が光つたままでの捕獲がポイントとなるのです。この捕獲技術は、私とヤンビの二人にしかできません」

「ふむ、職人技、というわけですね」とヨロハニは感心した様子で硬直しながらも体側の線状の「耳」を光らせるガヌイを見ていた。

「そうです。そして、最高純度を達成していたマスター耳石は、先日の爆破事件後、私と長老との相談で、いったん破壊することにしました」

「え？ 破壊されてしまったのですか？」とヤンビがかなり驚いた表情で問いかけた。

「そうなのだヤンビ。すまない、精製に七十二日もかけたというのに」とモサはふところから、透明なケーブに入ったマスター耳石の壊れた欠片をヤンビに見せた。ヤンビはその欠片が、まさにマスター耳石を破壊したものだと理解したのでらう、「いえ、長老様のご決定なら間違いないことです」と軽くうなづく、それ以上の事は聞かなかつた。

「ふむ。では、もうマスター耳石は存在しない、というわけですね」と監察次官は急に声のトーンを下げて「お話はよくわかりました。マスターを破壊された、ということは、まさにセントロモニの方々が保有技術を厳しく自己管理されているという事。この技術が汎宇宙域へ広がる心配自体がない、という事です。それがわかれば、私が確認すべき事はほかにはありません。ユイーナラインが復旧しだい捜査局にもどります」とモサとの面談の終了を願ひ出た。

「ご了解いただけるのでしたら幸いです。では、アニアンの拝殿までお送りしましょう」とモサはヨロハニを促して、ヤンビとともに中型浮遊艇へ戻つた。

その夜、セントロモニの役員たちの間に大きな衝撃が走つた。オケーニの内弟子として、アニアンの拝殿で修行していたロンナが失踪したのである。

夕方水汲みのために拝殿を出たまま行方がわからず、実家であるヨメノ家の城にも戻っていないかつた。調べてみると、拝殿内のロンナの部屋にはロンナの日常的な資料や用具、専用端末などがなくなつていた。また、ヨメノ家でも数日前にロンナ自身が立ち寄り、自分の部屋の家財整理がされて、めぼしいものは運び出された後だつた。

おそらくは、計画的な「家出」であろうと考えられたのだが、それがいったいなぜ行われたのか、誰にも想像がつかなかった。

「私にも探させてください」と役員会に申し出たのは、モサの助手、ヤンビであった。ヤンビとモサ、そしてロンナは子供のころからともに遊んだ仲間であった。ヨメノ家の次期当主であるロンナ、セントロモニー族の技術集団の名家トニカロ家の天才少年モサ、そして他星系から流れ着き、オケーニによって育てられたヤンビの三人は、長老の館に預けられ、オケーニによる英才教育を受けていた特別な子供たちであった。

特にヤンビは、ユイーナラインが宇宙を往く客船と接触事故を起こした時に保護された災害孤児であり、この星の政務に携わっていたオケーニ自身が預かり、育てることになったという特殊な経緯があった。元々不幸な身の上であったがゆえに、ヤンビはモサとロンナの二人を、真の兄弟以上に大事に思っていたのだ。「どこかに心当たりでもあるのか？」とモサはヤンビに聞いた。

「それは聞かないください。でも、気になっていることはあるんです」

「わかった。では聞かない。だが、事情はどうあれ、ロンナはこの星に、そしてセントロモニーには欠かせない人間だ。なんとか説得して戻ってきてもらえようにしてくれ」とモサは事情はわからぬまま、搜索をヤンビに託す事にした。長老をはじめ、数名の役員会の人間も、それを了承した。

ヤンビが闇にまぎれるように出かけたあと、モサは、次期当主の失踪という事態が外に漏れるのを防がねばならないと考えた。警察の人間であるヨロハニには、特に知られたくはなかった。ユイーナラインは明日の朝には復旧する。ヨロハニはすでに部屋に入り床に就いたようだった。明日、ヨロハニが発券するまでのわずかな時間、この緊急事態が露見しなければ、それでなんとかなる。

そう考えたモサは、万全を期してアニアンの拝殿の倉庫に床を取り、朝を迎えることにした。ロンナに代わってヨロハニを接遇し、朝いちばんのユイーナラインでお帰り願わねばならない。

仮眠のために倉庫の床で横になったモサは、いろいろと考えを巡らせていた。先日の爆発事件からの、この騒ぎはいったいどうしたということだろう。さすがにジュノーが送り込んだ賊は、秘宝に仕掛けられた爆弾のことまでは知らなかった。だから爆死したのだろう。しかし、あの秘宝のある部屋まで、どうやってたどり着いたのか？ 内部の者の手引きがなければ、いくらジュノーとはいえ、そんなことは不可能なのだ。ではいったい誰が？ 考えられるのは自分自身とオケーニ様を除けば、ロンナとヤンビしかいない。どちらかがジュノーとつながりを持っていたという事なのだろうか？ しかし、兄弟のように育った二人を疑う事はモサにはできなかった。仮にどちらかがジュノーと通じていたとしても、その心情をこそ知りたいと思っただ。いったい何故、こんな騒ぎを起こしてまで、秘宝にこだわらなければならないのか？

いや、モサにとって、それは愚問だった。マスター耳石だからこそ、事件は起きたのだ。あの耳石はこれからのセントロモニー族の行く末、あり方のすべてを変える。ひとつひとつ手作りで仕上げてきたロモニーの耳石が、品質はそのままに大量生産品になる可能性を秘めた革命的技術なのだ。だからこそ、爆破事件の後、マスター耳石を破壊することにモサも同意したのではないか。セントロモニー族が、大きく変わらざるを得ない、こんな時だからこそ、事件は起き、ロンナであれ、ヤンビであれ、それぞれの思いを遂げようと行動したのに違いないのだ。

複雑な思いに寝付けなかったモサだが、心労からの睡魔は強い力でモサをゆさぶり、やがてモサは前後もなく眠り込んでしまった。

しかし、翌朝を待つより早く、明け方に事件は起こった。

「モサさま、モサさま」とモサを起こしたのはロンナを説得するために出かけたヤンビであった。

「急いで起きてください、ヨロハニたち、いいえ、ジュノーの手下たちが、モサ様をさらにやって来ます、はやくお逃げください」

「何？ なんの話をしているのだ？」と、モサはヤンビの声に、いつもの工房での朝と勘違いをしたが、自分が寝ている場所が倉庫だと気付き、いまの状況を思い出した。

「戻ってきたのか。ロンナはどうした？」

正気に戻ったモサはヤンビに問いかけた。

「モサさま、お話しなければならぬことがあります。とにかくいったんこちらへ」とヤンビは倉庫の荷物の陰にモサをいざなった。

「もう、ジュノーたちが正門を破って、こちらに来ています。」

「どうということなんだ？」

「あのヨロハニという男は、ジュノーの手の者なのです。あれはロンナ様をジュノーに連れていくための案内人なのです」

「なんだったって？ どうしてそんなことに？」

「それはロンナさまが、ジュノーと取引をされたからです」

「取引だと？」

「モサさまには黙っていましたけど、ロンナさまは、ジュノーとセントロモニの合体を考えておられたのです」

「……」モサは返事をしたかったが、あまりに想定外の話に声も出なかった。あんな強引な取引で、業界の慣習破りばかりするジュノーと、この由緒ある技術集団セントロモニをひとつにしようと考えるなど、少なくとも礼節を重んじるモサにとっては、あつてはならないことだった。

「そんなバカな。仮にもヨメノ家の当主が」

「だからこそです。ヨメノ家を汎宇宙になだたる名家として発展させたかったです。そのためには、ジュノーのような裏の世界とも対等に取引をしなければならぬ、というのがロンナさまのお考えです」

「ロンナ、なんていう事を……」

モサにも、ヤンビにも、ロンナが焦っていることは分かっていた。子供のころから長老に同じように育てられた三人だったが、セントロモニの名家であるヨメノのロンナにとっては、「技術」でつながる、長老、モサ、ヤンビがうらやましかつたのだろう。その気持ちは、モサも薄々気づいてはいた。たぶんヤンビは、その愚痴を聞く役を受け持っていたに違いない。

「でも、ジュノーはロモニの耳石さえ手に入れば良かったんです。ロンナさまのプライドなど、ジュノーは気にもかけていない。私はそれが心配で、ロンナさまとヨロハニの落ち合うと聞いたキミハ峠に出かけたのです。もうマスター耳石がなくなつたいま、ロンナさまに交渉のカードはありません」

「おまえ、もしかして自分を差し出そうと思ったのか？」とモサは心の中であつた、自分の思いを少しだけ口にした。

「そうです。そうでもしなければまとまるものもまとまらないと思つたのです」

モサは、すまないと思つた。そして心の中でヤンビに詫びた。爆破事故は、誰かの手引きがなければ起きない事。その手引き者のひとりとして、モサはヤンビも想定していたからだ。

「ロンナさまは、ヨメノ家という正統な家柄で、ジュノーとセントロモニの合体を進めたかつたのでしよう。でも、奴らは、セントロモニの伝統の価値がわかるような組織じゃなかつたんです」とヤンビは、あまりヤンビが口にしないような妙な意見を言った。

モサが、それを少し奇妙な気持ちで聞いていた時だった。モサが寝ていた倉庫の扉がドンドンと大きな音で叩かれ、錠の部分が光つたかと思うと、扉が破られた。

そこにはあのヨロハニを先頭に、7、8名ほどの武装した人間が並んでいた。

「モサ殿、ここにおられるのは分かつていますよ。おとなしく出てきなさい」と、ヨロハニが大声をあげていた。これまでのヨロハニの物静かな雰囲気とは変わって、どこか凄みのある物言いだった。

ヨロハニの手下が、荷物の裏を探そうとしたので、ヤンビはあわてて別の荷物の陰に隠れた。ヤンビはモサに「こちらに」と合図したが、モサが荷物の陰に隠れるより早くヨロハニの持つ携帯投光器の大きな光がモサの姿を闇に浮かび上がらせてしまった。

「ここにおられたか。悪いが一緒に来てもらいますよ」とヨロハニがモサに言った。

「どういう事だ」と何も分からず、モサは、ただそう聞くだけだった。

「マスター耳石を作れる人間が必要なんだ。ジュノーのswant総督がご所望なんだよ」

と言うが早い部下に「やれ」と合図をする。いかにも屈強そうな男たちがモサを取り押さえようとした時だった。

「そうはいかんぞ、スニトリのギユイジー」と、声をあげたのは、ヤンビだった。手には、倉庫に置かれていた荒縄を持っている。

「誰だ！ なぜ俺の名を知っている」とギユイジーと呼ばれたヨロハニは、持っていた投光器を声のした方向に向ける。そこにあつたのは、腰が曲がり片目が不自由なヤンビの姿だった。

「お、お前はモサの助手、な、なんでお前が！」

とギユイジー驚いた声で言うより早く、ヤンビは倉庫の天井を走る鉄の梁に、縄を投げつけた。縄の先には、いつの間にか手のひらほどの大きさの歯車がくり付けられており、投げられた縄は、ヤンビの手業で見事に梁に巻き付いた。ヤンビはそのまま、縄を引いて一気に中空をスイングすると、武装した男たちの中に飛び込んだ。

スイングによる強烈なキックで男たちが態勢を崩している間に、ヤンビは床にすべりこむ。今度は、別の

歯車付きの縄をもう一度ふるって、男たちの足をまとめて絡めとった。バランスを崩した男たちから、ヤンビはすばやくサイレントガンを奪い、それがユミネ46タイプと知るとセミ安全装置を作動させユミネ46に標準装備のパラライズボタンを押す。目には見えない強力なパラライズ信号が放たれ、とたんにその三人は気絶してしまった。

残りの数人は、てっきり仲間が殺されたものと早合点し、パニックから手持ちのサイレントハンドガンをメクラ撃ちした。しかしヤンビは床に伏せた姿勢のまま、先ほどの縄を近くの柱に巻き付け、今度は倉庫の床をスライドするように移動すると、ハンドガンを撃っている男たちの背後に回り、サイレントガンのパラライズショックを、次々に男たちの首筋に打ち込んで、全員を気絶させてしまった。

すべては、あつと言ふ間の出来事だった。ヤンビは、茫然としている偽ヨロハニこと、スニトリのギュージーに近づくと、ギュージーのポケットに入っていた手錠をスツと抜き取り、すばやくギュージーの両手に手錠をかけた。

「な、なぜお前が、まだここで…、どういうことだ」とギュージーは恐ろしいものを見たかのような表情でヤンビを見ていた。

「それ以上はしゃべるな。お前が不利になるぞ」とヤンビは言う、ギュージーもまたパラライズで気絶させた。

「ヤンビ、いや、ヤンビじゃない。お前は、お前はいつたい、誰だ？」とモサは、助けられた事より、あの背中が曲がり、片目が不自由だったヤンビが超人的な動きをしたことに驚き、あつけにとられたままだった。「すみません。私はヤンビさんではありません。ヤンビさんのお体をお借りして、この悪党たちが、あなたを拉致するのを防がせてもらいました。宇宙警察の潜入捜査官レビンといます」と超人的な活躍をした、その男は自分の本当の姿を明かした。

「なんだって？ 潜入捜査官のレビン？ どこかで聞いたことがあるぞ。墓堀レビン…。そうだ、宇宙警察の科学主任！ 死人を捜査に使う人でなしと赤縄【せきじょう】でサーチしたことがある」とモサは記憶をまさぐり指摘した。

指摘を受けたレビンは暗い表情になり、しばらく無言だったが、「さすがは、セントロモニの中核を担うモサ殿だ。『墓堀レビン』の呼び名など、知っているのは警察上層部数名だけです。しかし、知っていて欲しくはなかった」とヤンビの姿のまま、沈んだ声で言った。

「そう、墓堀レビンは死体にまで入る、汚れた警官という噂だ。死体？ 死体？ 待て、待て待て待て。どういふことだ、ヤンビは、ヤンビはどこに行つたんだ？ ま、まさか」と、突然モサは恐ろしい可能性に気づき、その恐ろしい事実を受け入れられずにいた。

5

知りたくない事実に向き合ってしまったモサを見て、レビンはゆつくりと口を開いた。

「あなたが気付きたくなかった、そのまさかです。ヤンビさんはお亡くなりになりました。だから、お体をお借りした、と言ったのです。あなたにとつてヤンビさんは、兄弟以上のご関係。あなたのショックを考えて、もつと手順を踏んで正体を明かしたかったのですが」と、レビンはとても悲しそうな表情で話した。

「ちよつと待ってくれ、なんでヤンビが死んだ。意味がわからん。どういう事だ」と、モサはパニック状態でレビンに説明を求めた。

「ヤンビさんは、この私の部下の名を騙ったギュージーによって殺されたんです。ロンナさんの命を救おうとしてね」

「ヤンビがロンナなの？」

「順を追って説明しましょう」と言つて、レビンは説明をはじめた。

6

レビンはずっとジュノーの動きを追っていた。それは超高度な盗聴が可能な「ロモニの耳石」の技術拡散を防げという政治的な指令が出されていたからだ。ジュノーのような組織犯罪グループの手にそんな技術が渡ってしまったのは宇宙社会の秩序維持が困難になるだろう。

そんな折起こったのが、アニアンの拝殿での爆発事故だった。これが、単なるジュノーの侵入犯の失敗とは、レビンにはどうしても考えられなかった。事故報告書を見る限り、この爆発事故は内部での協力者なし

に起きるはずがなかったからだ。おそらく内通者がセントロモニ内部に居る。それはジュノーの触手がセントロモニのかなり深いところまではいり込んでいるという事だった。

事は一刻を争った。一度闇の組織に取り込まれてしまった技術は、管理の目を逃れ、どんな形で宇宙全体に広がってしまうか予想もつかないのだ。

レ빈は、直属の部下であるヨロハニを、監察官という名目で調査に向かわせる。しかし、ヨロハニはユイーナライン九九七号とともに爆破され、連絡の取れない状態になってしまった。

「どういう事だ！ ジュノーの差し金か？」とレ빈は情報処理長のマトに聞く。

「有意操作ミサイルの意識波は遠くマニハンダラ星雲から出ているとみられます。ジュノーの仕業である可能性が高いですね」

「セントロモニには手を出すなということか。見過ごせんな。すぐに動く。アイバニーCを出してくれ」

アニアンニウム星に到着したのは、レ빈とわずかな部下だけだった。転送装置で拝殿の近くに降り立ちたかったが、ユイーナ小惑星群はあまりにヨイーヌ波反射が強く、物理的転送が行える状態ではなかった。

「仕方がない、”釣り糸”を使おう」とレ빈は指示を出した。

「使えますかね？ そんなに都合よく死人が出るとは思えないですけど」と「釣り糸」こと、意識波を拡張変転させた遠隔死体走査ビームの照射を準備しながらマトが愚痴った。

「いや、遅すぎるくらいだ。おそらくセントロモニ近辺で何らかの命のやり取りが起きている。事態はすでに人命を踏みつけにするレベル5に到達している」

そうレ빈が推定した通りだった。「釣り糸」をアニアンニウム星のセントロモニ近辺に照射すると、警察の意識データベースにも登録されているふたつの意識波が「死亡」のフェーズに入っていた。それはロナとヤンビの意識だった。

7

「私が潜入したのはヤンビさんの亡骸でした。亡くなって間もないヤンビさんの体には、あなたやロナさんへの厚い友情の気持ちがあふれるほどに満ちていました。

ヨメノ家ほどの旧家に星系を超えて政治的アブローチをするのは大きな社会的犯罪です。おそらく、その宇宙法を犯して提携を組もうとした事実を隠すため、このギユイジーは組織からロナさんを殺害することを命じられたのでしょう。ヤンビさんは、そこまで見越しておられた。だからギユイジーがロナさんを殺そうとした瞬間に身をかばって身代わりに殺されてしまったのです」

「なんてことを！」

モサはすでに目を真っ赤にして涙を流し、倉庫の床を叩きながらヤンビの死を呪っていた。

「なんてことを！ なんてことを！」

ヤンビの体を借りていたレ빈には、そのロナナの悔しさが、すべて読み取れてしまった。

「そうですね。ヤンビさんはロナナの耳石の秘宝そのものを闇に葬り去ろうとしたのです」

レ빈はモサをさとすように語り始めた。確かに双頭双尾の魚、ガヌイの光輝状態での捕獲は、モサにもできた。しかし、実用に足る光輝状態で捕獲できる比率がモサとヤンビではまったく違っていた。ヤンビは8割の確率で最上の光輝状態でガヌイを捕獲できたが、モサは二百回に一回。しかも、その捕獲したガヌイでさえ、マスター耳石精製に足る高光輝状態のものは十尾に一尾程度。それがモサの偽らざる実力だった。

「ヤンビさんは本当に昼夜をたがわず捕獲練習をされていましたからね。技術長として忙しいあなたにはできない事だ。悔やむような事ではないですよ」

「ヤンビは、ヨメノ家と技術陣とか分離しかねないマスター耳石の存在自体を、ずっと憂いてたんだ。私はそれを知っていながら…」

とモサは泣きながら悔しがった。

「ロナナさんがそれを望んだのですね？ いくらでも複製が取れるマスター耳石があれば、相対的に技術陣の存在価値は低くなり、政治をつかさどるヨメノ家のセントロモニでの発言力が増す。そのロナナさんの望みを、問題があることを承知であなたとヤンビさんは受け入れたのですね。ただ幼なじみの友人の望みとして」

「そうだ。それがロナナの野望に火をつけることになるとは…」

「できてしまったものを無くすることは難しい。特に新しい技術は。だから、あなたと長老がマスター耳石

を破壊したことを知ってヤンビさんは、自分の技術も永遠に封じてしまおうとしたのでしよう。」

「私は、ヤンビがその技術を持って、外の世界に出ていくかもしれないと思っていたんだ。そして、それができるならその方が良いとすら思っていた。ヤンビは本当によくやってくれていた。だからもう名声を得てもいいはずだと私は思っていたんだ。ロンナはヨメノ家の当主。私はセントロモニの技術長。そしてヤンビは汎宇宙に名だたるロモノ耳石の名工として名を成せば良い。そう考えていたんだ」

「そうですか。皮肉なものです。ロンナさんといい、あなたといい、このアニアンニウムに生まれたものが、この星の外での名声を価値あるものとして、長老やヤンビさんのように、外から来たものがこの星に住む人たちの幸せを最優先で願うなんて。ヤンビさんの気持ちはこの体からひしひしと伝わってきます。ヤンビさんはただ、いまのまま、あなたとロンナさんと、ずっと一緒にこの星で幸せに過ごしたかった。それがそがヤンビさんにとって一番大事なことだったんですよ」

「ヤンビー」

レビンの言葉を聞いて、モサは失ったもののあまりの大きさに叫ばずにはいられなかった。

「本当に素晴らしい方を失いました」

レビンは悲しみを湛えたヤンビの顔で、素直で短い弔辞を述べた。